

教材名 星野君の2塁打（東京書籍5年p.80 「法やきまり、権利と義務」、学校図書6年p.14「身の回りの大勢の人たちとの関わり」より良い学校生活、集団生活の充実、あかつき6年p.94、「規則の尊重」より良い学校生活、集団生活の充実）

1. 本教材について

少年野球チームで一員である野口君はある場面で監督からバントの指示を受けた。しかしその指示には従わず、2塁打を打ちチームは勝った。しかし「チームで決めた規則を破った」として監督から出場停止を受けた、という話である。

「あかつき」の設問では、「星野君の取った行動を通してきまりを守り、義務を果たすことの大切さについて考える」と書かれている。

本教材を読むと次のような疑問が浮かぶ。

監督が話すそれが規則になるのか、最初の話し合いでは自由に意見が出て議論が行われたのか、少年野球というのは規律やチームワークの心を養うためにあるのか、野球を楽しむということは大事なのではないのか、出場停止というのは行為にふさわしいペナルティなのか、ペナルティはあらかじめ明示されていたのか、バントという作戦をどう考えるか。

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

この教材は教科書会社によって多少異なっているが、どの教科書も、星野くんの行動は間違っており、監督の指示に従うことが「正解」であると読み取れるような内容になっている。授業はその正解に向けて行うことが想定されているように思われる。しかし、自由に発言させれば子どもからいろいろな意見が出ると思われるし、参考資料にあるようにスポーツ指導者の中にもさまざまな考え方がある。さまざまな考え方を参考に活発な対話を行いたい。

指導過程は1限で計画したが、ディベートまで行うには少なくとも2限は必要だと思われる。

3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導 入	何らかのスポーツをやっている子どもが多いと思うのでどんなスポーツをしているのかを聞いてみる。	
展 開	「星野君の2塁打」を各自で読む。質問を受ける。感想を聞く。 別府さんが星野君を出場停止にしたことをどう思うか、聞く。 4人くらいのグループに分かれ、別府さんの措置についてディベートを行う。 別府さんの行っていることに賛成のグループと反対のグループに分ける(教師が指名)。各グループで賛成、反対の言い分の根拠などを相談する。主張の仕方を相談する。 その際、別紙資料を参考にする。 2グループでディベートを行う。	音読しても良い。先生が読んでも良い。 ディベートは正式のものでなくても良い。ルールはあらかじめ決めて説明する。全員が何らかの形で参加できるようにする 司会もできるだけ子どもたちで行う
ま と め	教師がコメントする	できるだけ論点の整理が出来るようにコメントする

参考資料

▲前全日本ラグビーチームヘッドコーチ エディージョーンズズの発言

<https://www.sanspo.com/rugby/news/20151013/jap15101318480016-n1.html>

(SANSPO. COM2015年10月13日配信 最終アクセス2019年2月7日)

さらに19年に向けて、日本ラグビーが取り組むべきことにも言及した。エディーHCは「日本のラグビーは本領発揮できていないと常に思っている。日本には優秀な選手がたくさんいる」と一言。続けて「日本では高校、大学、トップリーグでも高いレベルでパフォーマンスする指導ができていない。規律を守らせるため、従順にさせるためだけに練習をしている。それでは勝てない」と、日本ラグビー界の問題を指摘した。

▲元全日本サッカーチーム監督岡田武史の発言

元日本代表監督・岡田武史×JAXA 名誉教授・的川泰宣「人は、夢を追う仕事を応援したくなる」
(au HAKUTO MOON CHALLENGE のHP より 2019年2月7日現在は削除されています。)

的川：野球の試合で、1アウト、一塁二塁、1点差で負けているときに、星野君がバッターボックスに立った。そこで、監督はバントのサインを出すんですが、星野君はサインを無視して打つんです。結果的にそれが二塁打になって、逆転に成功する。星野君は大歓声に迎えられるんだけど、監督はサインを無視されたので良く思わなかった、というあらすじです。そして私の学校の授業では、先生がクラスの生徒に「さて、星野君の行動をどう思いますか？」と問題提起したのです。ぼくなんかは「そりゃあ、勝つほうが嬉しいよな」って思ったんだけど、「ルールは守るべきだ」っていう人もいて、クラス全体の意見は大体半々になったんですよ。

岡田：面白いですね。サッカーでも2人で守る局面では、「1人は必ずボールを取りに行き、もう1人はカバーリングするために後ろにいる」と指示するのがセオリーなんですけど、2人でボールを取りにいけば奪えるチャンスだったのに、「監督の指示だから」と、失敗を恐れてチャレンジしない選手がいるんです。でも、そこで自分自身で判断してリスクを冒したチャレンジができないと本物のプロじゃない、とぼくは思っていて。そういうチャレンジが日本の社会は少ないんですよ。自分で判断して、もしボールをカットできたら、それは最高の喜びだぞって伝えたくて、このチャレンジのことを「エンジョイ」って呼んでいます。まさに的川さんの話と同じだから、今度からサッカーのミーティングでも『星野君の二塁打』を使わせてもらおうかな(笑)。

▲DeNA 筒香選手の発言 ライター 広尾 晃 (『東洋経済オンライン』1月16日)

<https://toyokeizai.net/articles/-/204757>

最終アクセス2019年2月9日

DeNA 筒香選手は、日本では子どもたちの野球離れが進んでいると指摘し、その原因を三つあげた。以下、「 」内は筒香選手の語ったことである。

①勝利至上主義

「僕も小さいころに野球を始めましたが、野球を始めた瞬間から『勝たなあかん』と言われました。そして、『こうやって投げるんや』『こうやって打つんや』『こうやって走るんや』『こうやってプレーするんや』と言われてきました。」

「皆さんの時代もそうだったと思いますが、『勝たなあかんよ』『勝たないと意味がない』と言われ続けてきたんです。」

「僕は堺ビッグボーイズで中学からお世話になり、ここまでやってきましたが、今の少年野球を見ると、『楽しいはずの野球なのに、子供たちは楽しそうに野球をやっていない』と思うことがすごく多いです。」

②子どもたちは大人、指導者の顔色を見て怒られないようにプレーしている

「本来なら、いいプレーをしよう、もっと遠くまでボールを飛ばそうと思って野球をしないといけないのに、ここで打たなかったら怒られる、エラーしたら怒られると思いながら野球をやっているように思います。」

③答えを指導者や親が与えすぎるので、子供たちが指示待ちの行動しかできない

「もちろん指導者が勝ちたくなる気持ち、いろいろ教えたくなる気持ちはわかりますが、それが将来の子供たちのためになっているかと言えば、なっていないと思います。指導者も、親も言いたいのわかりますが、そこをじっくり我慢し、見守ることが大事ではないでしょうか。」

筒香選手は、このように思うようになったのは2015年ドミニカ共和国でウインターリーグに参加したからだ、と言い、次のように語った。

「ドミニカ共和国では指導者は何も言わずに子供たちを見守っています。そんな中で、小学生の子供たちがジャンピングスローやグラブトスを当たり前のようにやっています。指導者はそうしたプレーでミスをして何も言いません。だから子供たちは失敗を恐れず、何回も失敗しながら新しいことにチャレンジしていきます。僕は、子供たちが何の躊躇もなくチャレンジしている姿を始めて見ました。」

「バッティングもとにかくフルスイングです。ドミニカには16歳から入ることができるMLBアカデミーを30球団が設置しています。これも見学しましたが、ここでも変化球を投げる子はいませんでした。ほとんどがストレートをど真ん中に投げ込む。バッターはそれをフルスイングする。というのが基本です。」

「こういうドミニカ共和国の小学生と、日本の小学生が今の時点で対戦すれば、日本のほうが大きく勝ち越すと思います。日本では小学生から変化球を投げますし、細かいプレーも身につけますから。でも、それが大人になったときには、すっかり逆転して、凄いい差になっています。」